

## ヘーゲル『大論理学』における量の適用範囲

真田 美沙

### 1. 量カテゴリーについての問い

本稿ではヘーゲル『大論理学』<sup>1</sup>における量のカテゴリーの適用範囲について考察する。以下では量的差異に関する哲学史的背景を概観した後、量カテゴリーの適用範囲についての問いを提示したい。

精神と物体はどのような仕方で区別されうるのか。ライプニッツは精神と物体を、物心一元論的な連続律のもとに捉え、「自然は決して飛躍しない」<sup>2</sup>としたが、シェリングはこの命題を受け、『私の哲学体系の叙述』(1801)において、改めて「主観と客観の間にはおよそ量的差異以外の区別は不可能である」<sup>3</sup>という命題として提出した。ヘーゲルによればこうした量的差異は、カントやフィヒテも重視する近代の根本命題である(GW21, S. 227)。しかしヘーゲルはこの、すべての対立は単に量的なものにすぎない、という命題に対して批判的な態度を取らざるをえなかった。なぜなら、存在は、必ずしも定量によって明確に把握の可能なものだけではないからである。数値化の可能な物理的客体に関して量的な表現を行うことと、外延性によって明示化されることのない精神的な事柄を量的な評価のうちへと還元することとは区別されなければならない。両者の間には、ペルクソンが『意識に直接に与えられたものについての試論』<sup>4</sup>の冒頭で指摘するような、極めて曖昧で、そして重要な問題が潜んでいるのである。

したがって本稿は量カテゴリーについての問いとして、精神的なものを量のカテゴリーから考えることは果たして可能なのか、量的な特性記述はどのような存在にまで広げることが可能であり、その限界はどこにあるのか、という問いから出発する<sup>5</sup>。ヘーゲルにおいて精神的なものである魂や性格、天才といったものが量的に把握された場合、量的把握は自然物理的な評価軸へと還元す

ることへとつながるのかどうか、精神に量的なカテゴリーが適用できない一方で、性格や天才には量的カテゴリーを適用できるとすれば、その差異はどこにあるのか、という問題について考察する。

したがって量カテゴリーの適用範囲を問うために、まず第2節では『大論理学』における内包量と外延量との相関を、自然物理的な例と精神的なものの例から考察する。第3節では、内包量の適用範囲の問題、すなわち内包量が魂や精神にふさわしいかどうかという問題を、カントの「魂の持続性に関するメンデルスゾーンの証明に対する論駁」についてのヘーゲルによる批判から考察する。第4節では量の適用範囲が、形而上学、人間学、「精神現象学」の枠組みからいかに限界づけられるのかということ、モノアの体系<sup>6</sup>、自然的精神、自立した精神としての人格のそれぞれに生じる量的規定性を確認することで明らかにする。量的規定によって捉えられた精神的なものの最たる例として、ヘーゲルの「精神の深さ」という言葉を挙げることができる。そこで第5節では精神の「深さ」と言われる場合の精神のあり方と、ヘーゲルが「深い」という一つの内包量を示すための言葉をどのようなものとして捉えていたのかを明らかにすることで、量カテゴリーが適用される精神の特性を解明する。以上の量カテゴリーの適用範囲の考察を前提にして、量的規定性が顕著に現れる局面を、第6節では『大論理学』における機械的過程としての伝達から、第7節では『精神現象学』における人相術に現れる表現から考察する。伝達と表現の量的規定の相違の考察を通して、量カテゴリーが適用される対象の特性を明らかにする。

## 2. 内包量と外延量——内包量の適用範囲をめぐって

ヘーゲルは『大論理学』のなかで量を質の止揚されたものとして位置付ける。質が、一般に色・味・熱など直接的に見たり触れたりしてわかるものであるのに対し、量は存在に直接的にあるのではなく連続性や分離性、数・単位・集合数という規定性に基づいて明らかになるものである。ここでは、その量について論じられた箇所、外延量と内包量との同一に関する註釈1に着目する。

外延量とは直接的に外延として把握可能な量的規定のことである。そのため、線の長さはそのままで外延量だということができる。一方、内包量は外に延長

としての規定性をもたない量であり、内包量の量的規定性は、内包量と相関関係にある外延から間接的に導かれる。ヘーゲルにおいては内包量がどの程度であるかは内包量に伴っている外延量に求められなければならない、両者は相関関係のもとにあり、外延量が内包量へと移行し、内包量が外延量へ移行するようなものとして考えられる。下の引用では、まず音と色、明度における内包量と外延量の関係が示され、つぎに「精神的なもの *das Geistige*」についても同様のことが示される。

より高い音はより内包的な音としてあり、同時に振動数のより大きな大きさとしてある[振動数または周波数の例]、あるいはより高い度に帰せられる音のより大きい音は、より広い空間でも聞こえる[音の大きさ、音圧の例]。——より弱い色で同じ仕方では[彩られる] よりも、より内包的な色でもって、より大きな平面が彩られうる[彩度の例]、あるいはまた、強度の一種である、より明るいものは、より弱い明るさのものよりも、さらによく見える[明度の例]、など。

同様にまた精神的なものにおいても、性格、才能、天才の高い強度は、遠大な定在、広大な影響力、多面的な接触をもつ。最も深い概念は最も普遍的な意義と応用をもつ。(GW21, S. 216.[ ]は筆者の補足)

一つ目の音の高さの例は、「より高い音」が「より内包的な大きさ」という内包量の規定性の側面と、「振動数のより大きな大きさ」という外延量の側面が言われる。二つ目の音の大きさの例では、音は、大きな音(内包量)であるほど広い空間(外延量)に響き聞こえることが言われる。三つ目の色の例では、「より内包的な色」で彩るほうが、より広い平面を彩ることができることが言われる。もし同じ彩度で均一に平面を彩ろうとするならば、彩度の強い赤で塗るほうが、淡い赤色で塗るよりも広い範囲を塗ることができる。四つ目の明度の例は、強度の一種として内包的に「より明るいもの」が外延的に「さらによく見える」というものである。強い光のほうが、弱い光よりも遠くを照らすし、明瞭に見える。これらの例は自然物理的な例である。それぞれ、高度の内包量をもつのに応じて、より広い外延量を獲得する。

「精神的なもの」の例としては性格、才能、天才がまずは挙げられている。『エンチクロペディ』「精神哲学」によると性格は、地理上の相違に由来する民族の知的性格や道徳的性格に関する内面的な傾向を含意し、才能は特殊分野で新しい何かを生み出す力を、天才は新しい類を生み出す力を意味する<sup>7</sup>。これらの高い強度としての能力が内包量としてあり、この広く行きわたって存在する影響が外延量としてある。概念に関してはその内包量は深さによって示され、それに対応する外延量は最も普遍的な意味と応用によって示される。ヘーゲルはここで、普遍を広い外延として捉え、概念を内包量と外延量の量的関係によって提示する。しかし概念の量的規定性に関して、『大論理学』の別の箇所では消極的に評価する。

[……]もし普遍のより広い外延ということが、普遍が特殊と個別よりもより多いもの、あるいはより大きい定量だと見られるとすれば、それは概念の本性が全く見誤られる。概念は絶対的根拠としての量の可能性であり、同程度に質の可能性でもある。言い換えると、概念の諸規定は同様にまた、互いに質的にも相違しているのである。したがって、概念の諸規定がまだ量の形式のもとにのみ置かれるときには、概念の規定はすでにそれらの真理に反した仕方では考察されている。(GW12, S. 48)

ここでは概念を「定量」として捉えることが誤りだとされている。概念は「絶対的根拠としての量の可能性であるとともに、質の関係性でもある」ために、概念の質的な規定性の相違が認められなければならない。先の概念を内包量と外延量によって示す箇所では、概念の内包量は深さによって示されていたが、ここでは概念の質的側面が強調されるにとどまり、深さについての言及はない。しかし内包量が、数などに表される外延量とは異なり質的側面をももつものだとすると、概念の深みは量的規定性と質的規定性とを同時に備えていると考えることはできるだろう。

### 3. カントにおける内包量の評価に関するヘーゲルの見解

以上では自然物理的なものに限らず精神的なものにおいても量的規定性が現れていることを確認した。概念と精神に量は相応しくない。しかし、「内包量」の位置づけはこの際に曖昧なものとなる。1816年時点では、ヘーゲルはカントの「内包量」という「存在のカテゴリー」が精神に適用されているとする。

カントの批判は、この概念統一の質的規定に対して量的規定を対立させる。魂は多様な相互外在的なものではなく、いかなる外延量をも含まないのであるが、意識は一つの度をもち、魂は各々の実存的なものと同様に内包量をもつという。しかしそのために、漸次的な消滅によって無への推移の可能性が指定されるとされる。——だが、この[メンデルスゾーンに対する]反駁は、存在のカテゴリーの、内包量の、精神への適用以外の何であるだろうか。——それ自身としてはいかなる真理をもたず、概念のなかではむしろ止揚されているはずの規定の精神への適用以外の何であるだろうか。(GW12, S. 196)

カントは「魂の持続性に関するメンデルスゾーンの証明に対する論駁」のなかで魂に限らず現存在を形成しているすべてのものに関する「実在性の度」を拒否することはできないとしてメンデルスゾーンを批判する。しかしヘーゲルは、実在性の度である内包量が魂にも当てはまりこれが無へと推移する、というカントの主張を批判する。というのも、ヘーゲルにおいて概念統一は他者との統一であるため、一方が他者の中へ推移し他者の中で変化するといったものではないからだ。しかしここでのヘーゲルの主張は、精神と魂とを区別していない。カントは魂にだけ言及し、精神に言及していないにもかかわらず、ヘーゲルはその魂を精神だと理解し、その精神には内包量を適用できないとする。このために、魂に量のカテゴリーがふさわしいかどうかという肝心な点が曖昧になった。そこでヘーゲルは『大論理学』第二版有論(1832)「外延量と内包量の同一」註釈2において、この点について再度論じることになった。この箇所においてヘーゲルは先のカントへの批判から態度を変えている。

この抽象的形而上学であったところの合理的心理学において、魂は精神とは見られずに、ただ直接的に存在するものと見られ、魂なるもの *Seelending* と見られる。その意味でカントが「どの実存するものに対しても同様に」、存在するものに定量のカテゴリーを適用するとともに、この存在するものが単純なものと規定されている限りで、これに内包量のカテゴリーを適用したのは正当である。(GW21, S. 216 強調原文)

合理的心理学において魂は精神として考えられない。このことをヘーゲルは1816年の段階では見過ごしていたため、魂に内包量を適用することは精神に内包量を適用することに等しいと考えた。しかし、後年の主張ではそれを見直し、カントが魂に内包量を適用したことを評価する。そのかわりに、魂と精神は異なるために精神には内包量を適用できないとする。

たしかに精神に存在はふさわしいが、存在は内包量のもつ強度とはまったく別の強度を具えている。むしろ、その強度は、そこにおいて単に直接的な存在の形式と存在のあらゆるカテゴリーが止揚されているような強度である。(GW21, S. 216)

ここで精神は内包量の強度とは異なる強度をもつとする。その強度は、「単なる直接的な存在の形式と存在のあらゆるカテゴリーとを止揚しているような強度」である。この、精神には内包量は適用できないということはヘーゲルの一貫した主張である。そのためこの後年の「魂の持続性に関するメンデルスゾーンの証明に対する論駁」への言及は、カント評価を正確に行った箇所として読むことができると言える。

#### 4. 人間の自然的規定・精神的規定における量的性格づけ

精神的なものが内包量という規定性をもつても、精神は内包量をもたず、それらを止揚したような強度をもつのである、というのが上でみてきたヘーゲル

の主張である。この物質的なものと精神的なものとの関係は、とくに内包量をもつ魂がもたらす、物としての観念と不変性の観念から次のように述べられる。

魂という名前はかつて個別的で有限な精神一般について用いられ、合理的心理学または経験的心理学は同様に精神論を意味した。魂という表現は、それが他の諸物のように一つの物だという観念を頭に浮かび上がらせる。人は、この魂の座、つまり空間的規定、魂の諸力が作用するところの空間的規定を問ひ、さらにまたどうしてこの物が不滅であるのか、それが時間性の制約のもとに支配されながら、そのなかにおいて変化が取り去られているのはなぜであるのかを問う。(GW12, S. 197)

ここで魂は「一つの物」を思い起こさせるものと規定されている。この魂の作用が空間的な規定と時間的な規定のもとにあるということは、魂の作用は一つの物として有限性のうちにさらされているということである。しかし同時に、魂の諸力には持続的な性格が言われる。しかしこの「魂の諸力が作用するところの空間的規定」という文句のうちにすでに、強度的・内包的側面における持続性と外延的側面における空間的・時間的制約が、魂のなかで切り離されえないものだということがわかる。しかしヘーゲルが魂ということで述べるものは複層的である。モノダの体系における魂は物質的な原子でありながら、自らを心的で外延をもたないものへと変化させることができる<sup>8</sup>。モノダの体系における魂的なもの *Seelenhaftigkeit* について、ヘーゲルは次のように述べる。

モノダの体系は物質を魂的なもの *Seelenhaftigkeit* にまで高める。すなわちこの考えにおいて、魂は物質の原子一般と同様の原子である。湯気としてコーヒーカップから立ち上る原子は幸運な状況によって魂にまで発展することができる。ただ原子の表象のより大きな不明瞭さが、原子を、魂として現れるような物と区別するにすぎないという。(GW12, S. 197)

このモノダの体系においては、物質と魂的なものは程度の差において区別されるのみである。この例では、コーヒーの湯気の中の微細な粒子は、物質の原

子でありながらも、物質の伝達において観念的な仕方で広がり、自らを魂に発展させる。原子と魂の連続性において、両者は表象の明瞭さの度合いによってのみ区別される。したがって、表象の不明瞭さの大きい原子と表象の不明瞭さの小さい魂というように、両者間には量的差異のみが考えられる。しかしヘーゲルによるとこれは形而上学に属する。形而上学は、自然的要因に影響を受けることのない、魂なる物、原子、物質の原子という「直接性の形式」(ebd.)を扱う。だから、この形而上学では精神を対象にすることはできない。確かに、精神の最低の段階では、「精神は物質性のうちに沈められている」(ebd.)ため、人間学はこれを環境の影響のもとにある自然的精神として扱う。自然的要因の影響を被る人間の性格については『エンチクロペディ 第三部 精神哲学』「人間学」においても主体の自然的規定性として現れる<sup>9</sup>。この段階を通して初めて、形而上学は精神現象学へと移行するのであり、そこでようやく自立した精神をその他者との関係において考察することができるのである。

しかし『大論理学』の人格性に関する記述は、量的規定性を免れてはいない。この人格性とは、人間の規定性の一つではあるが、先に述べた性格・才能・天才などの自然的要因への依存が念頭にあるものとは区別されなければならない。絶対的始原、絶対的方法において内包的なものと外延的なものの獲得が同時に成立するような人格性は、何物をも失わず獲得したものを帯同し、自分の中で自分を豊かにし密にする。進行は外延的拡張であると同時に内包の増大としての内への進行でもある。この進行によって深みや力強さ、内包を最も保持するものが人格性である。

自己外行、すなわちさらなる規定のそれぞれの新しい段階はまた自己内行でもあり、またより大きな広がりにはより高い強度でもある。したがってもっとも豊富なものは最も具体的なものであり、また最も主観的なものである。またもっとも単純な深みに自分を取り戻すものが最も力強いものであり、最も広がるものである。そうして最高の研ぎ澄まされた先端は、ただその本性である絶対的弁証法によって一切のものを自分の中に把握し保持する純粋な人格性である。というのは、人格性こそ自分を最も自由なものとし、——最初の直接性であり、普遍性である単純性となすからである。

(GW12, S. 251)

自己外行は単なる外への流出ではなく自己の内への進行でもあり、絶対的弁証法の進行で獲得したものを保持する純粋な人格性は、「最高の研ぎ澄まされた先端」として最も豊富で具体的・主観的なものである<sup>10</sup>。この人格性は「もっとも単純な深み」に自分を取り戻している。ここでの「もっとも単純な深み」は、「内包量と外延量の同一」註釈1の最後の「最も深い概念は最も普遍的な意義と応用とを持つ」という言葉からもわかるように、内包量を示すと言えるだろう。

ヘーゲルにおいては概念や精神的なものが同時に量的でありうる(内包量が外延量を伴う場合、内包量と外延量が正比例の関係にある場合)ということについてはすでに言及してきた。このことは、ヘーゲルの画定する量的規定性の適用範囲にもかかわらず、量的規定性は物理自然的なもの(音・色・明るさ)に限らず、自然的影響のもとにある精神的なもの(性格・才能・天才)、さらには絶対的弁証法において普遍を獲得する人格性、概念、などのそれぞれにおいても現れるということでもある。

ではこの精神的な側面が量的な評価や程度の差異として捉えられた際、そこではどのような問題が生じるのか。次にこの点について考察することにする。

## 5. 「精神の深さ」とは何か

ヘーゲルは、精神に内包量を適用することはできないとする。しかし「精神の深さ」は明確に認められている<sup>11</sup>。『精神現象学』序文において精神の深さについて次のように述べられている。

精神の力は、ただその外化と同じ分だけ大きく、精神の深さは、精神が自身の展開において拓がることと、あえて自身を失うことと同じ分だけ深い。  
(GW9, S. 14)

ここで「精神の深さ」というものが「あえて自身を失うことと同じ分だけ深い」ということが、とりわけ重要である<sup>12</sup>。精神は、自分自身を解体し自分自身を

失うが、このことははじめのうちは、「ただ個別の兆候によって暗示されているだけである」(ebd.)。ただ精神の「深さ」が予感されるだけであり、ヘーゲルが比喩として述べているように、これはドングリの樹の全体像を見る前にドングリの実だけを見ているような状況でしかない。

「深さ」に関する考察は、ベルリン期に執筆された「ゾルガーの遺稿と往復書簡」<sup>13</sup> (1828)のなかにも見られる。なかでもティークのゾルガー宛て書簡において、ティークが自身のベームへと導かれた経緯(ティークはこれを自分で「ほとんど冒険的な軽率さで」と述べる)を語る箇所、ベームの思想を表現するにあたって「深い」という言葉が用いられることにヘーゲルは目を向ける。

【ティークのゾルガー宛て書簡より】

「私は自分のおとぎの国から進み出てフィヒテとシェリングを読み、そして容易に、それらがさほど深くはないということに気がきました。それらはまるで無数の玉から成る影絵か円盤にすぎないような不思議に満ちたものでした。」

【ヘーゲルによる補足】

「容易に」、なぜなら神秘主義に必要なものは一般的意味、すなわち抽象的理念だけであり、上で述べたように、思惟そのものは問題にできなかったからである。「さほど深くはない」というのは、思想の形式とその展開の形式において、深さの仮象は思想を知らない者にとって消えていて、つまり人は「深い」ということを普通はただその集中状態のうちの中身として、そして、J・ベームにおいてたいい見られるような、想像上の混乱と厳しさの状況のうちの中身としてしばしば考え、この「深さ」を中身の展開のなかで見誤る。<sup>14</sup>

神秘主義的なベームに傾倒するティークは、「思惟そのものには全く関心を持たなかった」ため、フィヒテとシェリングを軽率にも「さほど深くない」として片づけてしまう。しかしヘーゲルはこれに対して「思想の形式とそれを展開する形式において、深さの仮象は思想を知らない者にとって消えて」いるものとして、

「深さ」という仮象は「想像上の混乱と厳しさ」のなかで見出されるものだとする。フィヒテやシェリングの哲学はすでに十分に展開された思想形式の中にあるため、「深い」という混乱した印象をもはや与えはしないし、そうした印象を与える必要もないのである。

## 6. 伝達における量的規定

量は自然物理的な事象を説明する際に用いられるカテゴリーであると同時に、限定はあるにしても精神的なものにおいてもその理解の前提となるカテゴリーである。また、量は伝達に際しても一定の役割を果たす。とりわけそれは『大論理学』「機械的過程」のなかに現れる。「化学的過程」においては、伝達を可能にする媒体として物体の界では水が、精神の界では記号一般と言語がその役割を果たす。しかし客体の本性を重視する「化学的過程」と異なり「機械的過程」においてはそのような差異がどうでもよい *gleichgültig* ものとされている。

伝達は「対立者への推移のない伝達」(GW12, S. 137)と言われるように、一方から他方への変化ではない。伝達は、他への連続であり、あらゆる変質なしに普及させることである。ここにおいて伝達可能なものとしては、匂い、運動、熱、磁気、電気に代表される自然物理的なものと、法律、習俗などの精神的なものが挙げられている。精神的な伝達は、普遍という要素の中で行われるものとされ、そこにおいて一つの規定性が、一人の人から他の人へそのまま伝わり、変化されることなく普及するものとされる。匂いが大気中に広がっていくことがこの具体的な例としてまずは挙げられる。ここでヘーゲルは「しかし物質的な客観の伝達においても、その規定性はやはり観念的な仕方、いわば広がる」(GW12, S. 138)とし、伝達されるものは客観的なものとして外延をもちつつも、観念的でもあるとする。これに対して「人格性は客観がもつよりも無限に、より内包的な硬度をもつ」(ebd.)と言われる。しかしどちらも伝達されるものとしてある。また、元素や物質などの伝達される物的なものは、ここでは「不可秤量の作用素 *imponderable Agentien*」(ebd.)として規定されなければならない<sup>15</sup>。

ヘーゲルは伝達を実在的な機械的過程として捉える際、量的差異を積極的に用いる。そこには「より弱いもの」と「より強いもの」の区別がまず存在する。

より強いものがより弱いものを受け入れ、強いものと共にただ一つの領域を形成する限り、より弱いものはより強いものから捕えられ、浸透される。(GW12, S. 140)

強いものが弱いものを受け入れるとき、そこに異質性はなく、強いものが弱いものを含みもつことができるような関係にある。そのため両者は一つの領域のうちにあると言ってよく、弱いものは強いものに受け入れられる。また、強いものは弱いものとの間にある障害物を克服し、弱いものうちに到達する。だがこのことは量的差異をなす二つの客体に常に妥当するわけではない。ヘーゲルは、その弱いものと強いものの差があまりに大きい場合、両者が一つの領域を形成するのと同様な仕方では、強いものがそのまま弱いものに影響しないとする。

物質界において、弱いものが過度に *unverhältnismäßig* 強いものに対して却って安全である(空中にぶら下がっている麻布は銃弾によって撃ち抜かれず、また弱い有機体の感受性は強い刺激剤によっては障害を受けず、かえって弱い刺激剤によって障害をうける)のと同様に、全く弱い精神は、近い関係にある強い精神よりも、かえって強い精神にたいして安全である。人が全く愚かな人や高貴でない人を想像する場合、高い知力では高貴な人はいかなる印象をも与えることができない。(GW12, S. 140 f.)

強弱の差があまりに大きい場合、弱いものは強いものの障害に対してみずからを守り、共有される一つの領域を形成せずに、強いものからの影響を免れる。互いにそもそも一つの領域を形成しえないほどに強度が異なる場合には、一方の存在ともはや関わり合うことをしない。これは伝達がないことを意味すると同時に抵抗もないことを意味する。

理性に対抗する唯一の徹底的な手段は、理性と全く関わらないことである——非自立的なものが自立的なものと同様せず、両者の間に何らの伝達も

ない限り、非自立的なものはいかなる抵抗をなすこともできない。言い換えると、伝達された普遍をそれ自体特殊化することはできない。(GW12, S. 141)

極端な強弱の差のために共有されるはずの普遍がない場合、普遍に対する特殊もないので、そこに抵抗も反発も生じないことになる。伝達がなく、一つの領域が両者の間で成立しなければ、そこにはいかなる訴訟 Prozeß もない<sup>16</sup>。

二客体間における伝達においては、二者間に量的区別が前提され、強い強度をもつものが弱いものを圧倒するか、あるいは浸透するという形で、一つの領域と呼ばれる伝達の基盤を形成している。しかしこの伝達の成功が、一つの領域と抵抗の基盤を作るものとして言われたとしても、これは「魔術的な感染 Infektion」<sup>17</sup>と呼ばれて仕方がないものである。精神的なものが量的規定によって表され、仮にそこに量的区別が見出されたとしても、弱いと言われる方は、親に対する小さな子どものように、そして人間に対する動物のように、まだ無抵抗な態度しかとり得ず、真に精神的とは言えない。そして強いと言われる方もまた、弱い方(深くない方)との比較によってはじめて強い(深い)ということが言われるにすぎず、自立的な規定はまだもたないのである。

## 7. 表現における量的規定性

以上では、機械的過程における二つの客体間の伝達のなかに量的規定が働いていることを確認した。そこで最後に、『精神現象学』「観察する理性」章の人相術の議論における、個体としての人間が自分自身の内面を現実の外化させ、その内容を他者に向けて表現する場合に現れる量的規定について考察しておきたい。

ヘーゲルは18世紀末からすでにヨーロッパ中で関心を集めていたラーヴェーターの『人相術断章』を念頭に置きながら、器官によって内面を表現する個体とその観察について詳しく論じている。その中でも注目しておきたい点は、言語や労働における外化としての表現が、「表現しすぎる」と同程度に「表現したりない」とも言いうる、ということである(GW9, S. 173)。ここでは、この外化の

過程で元々の内面が外にそのまま維持されて、変更されることがないかということが問題になる。「表現しすぎる」ものは、内と外との対立がなく、表現においてそのままの内面が維持される。「表現したりない」ものは技量のなさのために外に対してその表現を確かなものできずに、変更が加えられ、すりかえられてしまう<sup>18</sup>。ヘーゲルが、この両者が共に同程度に起こりうると言うのは、たとえ内面が十全に外化されたところで、外化されたものがそのまま維持されて伝わるだけとは限らず、全く同じ表現がまた別の相手には誤解されて伝わることもあるからだろう。そのため、この‘zu sehr’、‘zu wenig’という表現の指標は、その外面を受け取り観察する複数の主体の側にあり、表現の過剰と不足は、各々の観察する主体の側が表現をどう受け止めるかに依存していると言える。だがヘーゲルはここで表現の伝達を、あえて過剰と不足でもって言う理由を示していない。

しかし、これに近い議論をプラトンの『ポリティコス』には見出すことができる。ヘーゲルが『自然法論文』のなかで『ポリティコス』における政治家のもつ技術と測量術との関係に言及しているように、大小に関する判定は技術と不可分の関係にある<sup>19</sup>。『ポリティコス』において、大小の判定の下し方はそれぞれ二通りあり、一つ目は事物の相互比較であり、二つ目は適正な限度との比較に基づく大小の判定だとされる(283e)<sup>20</sup>。そして技術によって作り出されたもののうち見事だとみなされるものは、「技術が適度というものを厳守して作るもの」だけであり、「多すぎるもの」とか「少なすぎるもの」も、相互比較によってのみ現れるのではなく、適正な限度に合致したものを作り出す際にも現れるのだと言われる。適正な限度に合致したものを作り出そうとめざすことで、「技術」の存立も可能になるのだ(284b-d)。そのため、表現しすぎる、あるいは表現し足りない場合はいずれも、適正な限度に合致したものではないという点で共に劣っている。

ヘーゲルは同様のことを『エンチクロペディ 第三部 精神哲学』「人間学」において述べている。そこでは、言葉による表現をもつことで感情の表現を抑える教養人(あるいは古代人)と、感情に浸りきり、大げさな表情と身振りでそれを表現する教養のない人との対比がなされている<sup>21</sup>。教養人と呼ばれる人は、大げさな表情や身振りを放棄することで、言葉という「適切な手段」で表現し、

語ることで、表現における中庸を得るとされる。そのため古代ギリシア人は、大きい苦しみを、適切に、演劇によって表したのである<sup>22</sup>。

したがってここでは、表現 *Ausdruck* と伝達 *Mitteilung* は異なるということが注意されなければならない。すでに見た機械的過程における伝達では、弱いものが強いものと一つの領域を形成するというように、精神的なものが量的規定によって表され、また内面と外面の区別はない。一方、表現においては内面が過不足なく適正な限度で外化されることが重視されるのである。

## 8. 結語

精神や概念に量のカテゴリーはふさわしくない。量的規定を持つ精神的なもの最たるものが「精神の深さ」によって示されるが、これは全体像を見る前の仮象であり、混乱のなかで見誤られるものでしかない。そのため、すでに展開された思想形式の場合、深いという印象は与えず、与える必要もない。強い精神が弱い精神を圧倒するというように、一つの領域と呼ばれる伝達の連続的な基盤を形成する場合もまた、精神が量的区別のもとで捉えられるが、両者とも相互比較により規定されるにすぎず、自立的な規定はない。たしかに精神的なものうちに量的差異のみを見出すことは、対立を無差別なものとして捉えることを可能にする。だが本質的差異があるにもかかわらず量的差異しか認められなければ、量とはそもそも自分自身の限界を越え出るものであり区別は失われることになる。したがって、精神的なものに量的規定が与えられる場合があっても、依然としてそのなかには、真の精神の占める場所はない。

本来質的に規定されるべきものを規定する際に、量的規定へと逃げ込むことは容易い。しかし、その容易さとは、遠くからアルプスの最高峰の頂を見上げて、その登り方と実際の山頂を知らない人が、ただ高く登ればよいと考えるようなものでしかない。これは道徳性の場面では、「本当の意志の理念」や「実体的な自由」(GW21, S. 226)を把握することができていない無力だと言われる。量的規定にのみ頼る態度は、それ自体で思惟の未熟さを曝け出してしまうのである。

註

1. ヘーゲル『大論理学』からの引用は以下の版に拠って行い、略号 GW、巻数、頁数の順に本文中に示す。G. W. F. Hegel, *Gesammelte Werke*, Hamburg 1968 ff.
2. ライプニッツ、『人間知性新論』(ライプニッツ著作集 4)、谷川多佳子、福島清紀、岡部英男訳、工作舎、1995年、26頁。
3. F. W. J. Schelling, *Darstellung meines Systems, Werke*, hrsg. von Manfred Durner, Bd. 10, Stuttgart 2009, IV 123.
4. Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Paris 1967, p. 1.
5. 本稿では『大論理学』における量章の分析は最低限にとどめる。ここでの論点はむしろ量論では中心的には注目されない量カテゴリーの限界を見極めることである。
6. ヘーゲルが「モナドの体系」と言う際、M・G・ハンシュによって通俗化されたモナド理解に依拠しており、そこで考えられているのはエピクロスやライプニッツにおける原子論である。
7. G. W. F. Hegel, *Enzyklopädie der Philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1830) III, Werke in zwanzig Bänden*, Bd. 10, Frankfurt a. M. 1970, S. 70.
8. ヘーゲルは『哲学史講義』において、エピクロスの形而上学についてディオゲネス・ラエルティオスの引用を参照している。そこでは、物体の表面から、感覚の気づかないほどのかすかな流れがあり、流れ出した後には補われるため、物体はいつも同じ大きさを維持すること、表面から出てきたものによって、私たちの内面に外界と似たものの、すなわち像が存在することが言われている。G. W. F. Hegel, *Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie II, Werke in zwanzig Bänden*, Bd. 19, Frankfurt a. M. 1971, S. 307 f.
9. G. W. F. Hegel, *Enzyklopädie der Philosophischen Wissenschaften (1830) III*, S. 70. ザントカウレンは人間学を「1 量的、2 量的 - 質的、3 質的 - 全体論的」な視点の三つの基本モデルに分類する。第一のものは動物としての人間に、第二のものは動物ではない人間に、第三のものは動物と人間の決定的な差異に重要性を与えるものであり、とりわけこの第二類型と第三類型が動物と人間の「質的な飛躍」を認めるという点は、ヘルダーからヘーゲルにおよぶ有機体観・人間観にも結びつく。実際、ザントカウレンは第三類型に関して、「精神的な自由裁量 geistige Disposition [精神的に分離して配置すること]」を可能にする言語についてヘルダーを参照する。言語的な観点における「分節化」が有機体の分枝化の過程と関わりながらも明確に区別されることもかかわる。Birgit Sandkaulen, „Die Seele ist der existierende Begriff“ Herausforderungen philosophischer Anthropologie, in: *Hegel-Studien* 45 (2010), 2011, S. 35-50.
10. 「先端」という言葉は量と密接に関係する。ヘーゲルの「大きさについての若干の考察」(1787)の最後には、クリストフ・マイナーズの『スイスについての書簡』に関する次のような覚書がある。「最高峰の山脈の荘厳な諸先端の外で、残りのすべての大地が闇夜で覆われるとき、明るく照らされた頂は他のものよりもとても深遠に見えてくる、と同時に、その諸先端が隣の谷を境界づけてしまったかのように見えそうである。」(GW1, S. 40)
11. 『大論理学』第二版有論(1832)では、精神には内包量が適用できないとするが、『精神現象学』(1807)では「精神の力」がその発現に比例し、「精神の深さ」が広がり自身を失うのに比例するとしているため、『精神現象学』では精神にも量的性質を認めているようにも見える。(GW9, S. 14)

12. 「精神の深さ」に着目した先行研究として以下を参照。小島優子、『精神の深さ——『精神現象学』における「外化」と「内化」』、知泉書館、2011年。
13. この批評でのヘーゲルの関心は、イエーナ・ロマン主義批判にある。ヘーゲルはティーク、シュレーゲルなどのイエーナ・ロマン主義者たちからゾルガーを区別する。このヘーゲルの批評に関する背景については以下を参照。海老澤善一訳編、『ヘーゲル批評集 II』、梓出版社、2000年。
14. G. W. F. Hegel, *Solgers nachgelassene Schriften und Briefwechsel*, in: *Berliner Schriften 1818-1831, Werke in zwanzig Bänden*, Bd. 11, S. 227.
15. 「不可秤量的 imponderable」という言葉が使用されるのは、『大論理学』のなかではこの箇所のみである。だがこの言葉の背景として、シェリングの『学問研究法に関する講義』(1803)における、光やエーテルについての「不可秤量的で圧縮できない物質 die imponderable und incoercible Materie」という表現や、『宇宙霊について』(1798)における計量可能性こそが光を物質にとどめるとい主張を考慮に入れる必要がある。(F. W. J. Schelling, *Vorlesungen über die Methode des akademischen Studiums*, hrsg. von Walter E. Ehrhardt, Hamburg 1990, V 321. F. W. J. Schelling, *Von der Weltseele. Eine Hypothese der höheren Physik zur Erklärung des allgemeinen Organismus*, hrsg. von Jörg Janzen, Stuttgart 2000, S. 8 f.)
16. D・デイヴィドソンは「信念、および意味の基礎」(『真理と解釈』収録)において、広く行き渡った一致こそが論争や誤解の解釈の唯一可能な背景だと言う。ヘーゲルが伝達なしでは抵抗もないということを経験的次元で語るが、デイヴィドソンの理解はこうした現象に関する言語行為論的解釈の余地を与えてくれる。「理論の目指すところは、不一致や誤謬を消し去ってしまうなどという馬鹿げたことではないのである。ポイントはむしろ、広く行き渡った一致は、論争や誤解がそれを考慮して解釈される、唯一可能な背景なのである、という点である。」Donald Davidson, *Inquiries into truth and interpretation*, Oxford University Press 2001, p. 153.
17. G. W. F. Hegel, *Enzyklopädie der Philosophischen Wissenschaften (1830) III*, S. 128. 「魔術的」とは、「内面的なもの」と外的なものとの無媒介な関係を意味し、ヘーゲル哲学においては、思考し感じる以前の感じる魂の段階に現れる。この背景には、メスメル(F. A. Mesmer 1734-1815)の「動物磁気 animalischer Magnetismus」という概念がある。当時、動物磁気は有機体の内に流れる磁気的な流体であり、これが存在間の交通の媒体をなすと考えられた。(上村芳郎、「心の魔術的關係——動物磁気・狂気・身体」、加藤尚武編『ヘーゲル読本』、法政大学出版局、1987年、166-167頁を参照。)
18. ヘーゲルは「すりかえ Verstellung」については、『精神現象学』『VI. 精神, C. 自分自身を確信している精神 道徳性, b. すりかえ』において詳細に規定されているが、本論文とのかかわりでは「良心章」における次の文が「すりかえ」を明瞭に定義づけている。「他の人々は、良心が他の人々に提示するものをすりかえることを心得ている。良心が提示するものは、それを通してある他の意識の自己だけが表現されたようなもので、彼ら固有の自己が表現されたものではない。他の諸意識は彼ら自身の自己を維持するために、提示されたものから自由であると知っているだけではなく、自身の意識のうちでそれを解体し、判断と説明によって無に帰さなければならないのである。」(GW9, S. 350)
19. G. W. F. Hegel, *Über die wissenschaftlichen Behandlungsarten des Naturrechts, seine Stelle in der praktischen Philosophie und sein Verhältnis zu den positiven Rechtswissenschaften*, Jenaer Schriften 1801-1807, Werke in zwanzig Bänden, Bd. 2, Frankfurt a. M. 1970, S. 483-487.
20. プラトン、『プラトン全集 3』、藤次令夫、水野有庸訳、岩波書店、1976年。

<sup>21</sup> G. W. F. Hegel, *Enzyklopädie der Philosophischen Wissenschaften (1830) III*, S. 195.

<sup>22</sup> ヘルダーリンの、「[……] オイディプス王はもしかすると／目がひとつ多すぎたのだ。／この男の苦しみは／筆や舌では、言い表せぬよう／思われる。演劇が／そのような苦しみを言い表す [……] 」という詩を受けて、フィリップ・ラクー＝ラバルトはこれらを「演技のしすぎ」や「悲劇的過ち」と呼ぶ。ヘーゲルは度量について論じる際に、古代ギリシアにおけるネメシスや中庸について言及するが、この背景にヘルダーリンと共有された悲劇的表現としての苦しみに関する理解がある。ヘルダーリンは「目がひとつ多すぎた」オイディプス王という言葉でもって、彼の節度を越えた知性を表わし、それによってもたらされる苦しみを表現するものとして演劇を捉える。(Philippe Lacoue-Labarthe, *Metaphrasis Das Theater Hölderlins*, aus dem Französischen von Bernhard Nessler, Rieden 1998, S. 26.)